

## フィリピンワークキャンプ

桑原 知世

14日間のフィリピンワークキャンプを通じて日本人キャンパー、フィリピン人キャンパー、子ども家の子ども達、スタッフさん、ワーカーさんから多くのものを得、そして共有する事が出来た。私たち CFF(Caring For the Future Foundation Japan)39回フィリピンワークキャンプの柱となる目的は、親から虐待を受け、親と一緒に暮らせない子ども達や、親と一緒に住める状態であっても生活が困難なため学校に行けない子ども達を引き取る児童養護施設、「子どもの家」の新しい施設の建設であった。現在「子どもの家」には男の子7人女の子5人の12人の子ども達が住んでおり、8歳~15歳までの子ども達が一つの建物の中に住んでいる。そこで、思春期を迎えた、または迎えつつある子ども達のために女の子だけの施設を作るため、そして子どもの数を増やすため、37回、38回、39回キャンパーが現地のワーカーさんと力を合わせて施設作りの手伝いをした。その他にも City Tour、peace seminar、気持ちをキャンパーとシェアするセミナーなどもあった。

まず初めに「子どもの家」での生活を述べたい。「子どもの家」はマニラから車で6時間のところにある PANGASHINAN の SUAL というところにある。村の人々の暮らしは裕福とはいえなかった。しかし、みんな心が温かい人で、いつも笑顔だった。私たちが宿泊したところは「子どもの家」の敷地内にある「バハイクボ」と呼ばれるフィリピンの伝統的な建物だった。屋根はバナナの葉で出来ており、床は竹の高床式住居だった。そこに4人ずつで寝泊りした。そこでは水のシャワー、手で水を汲み足して流すトイレ、トイレでは紙を流してはいけないし、フィリピン人はトイレで紙を使わない事など日本には考えられないような生活をしていた。しかし、私たちはいつの間にかフィリピンの生活に慣れ、帰国した時いろいろと戸惑ったことも多かった。「20日間(キャンプ14日+旅行6日)しか生活していないのになぜ?」と思ったけれど、「日本人」「フィリピン人」という事を越えて一緒に生活し、フィリピン人の温かさに触れるうちに、フィリピンの居心地のよさを体験し、すっかり順応していたからであると思う。そして月曜日から金曜日までの私たちの生活は6時半の起床から始まり、6時50分の Morning Devotion(聖書の勉強)、7時15分 Breakfast、8時半 Field Work、11時半 end of work、12時 Lunch、13時 Siesta(休憩)、14時 Field Work、15時 ミリエンダ(Snack)、17時半 end of work、18時半 Dinner、19時45分 Seminar、21時半 end of session and rest、その後には私は leader meeting と一日が終わる。そして土曜日、日曜日は子ども達と遊んだり、City Tour へ出かけた。

次にこのキャンプの大きな柱であるワークについて述べたい。私たち日本人キャンパー20人とフィリピン人キャンパー5人、子ども家のスタッフさん、子ども家がある村のワーカーさん(実際に施設建設をしている人。職業が大工というわけではない)と一緒に月曜日から金曜日まで朝の8時半から17時半までお昼とミリエンダ(お菓子休み)の時間をはさんでずっと施設の土台作りをしていた。私たちは4つのグループに分かれ、そのグループでワークをし、セミナーを行った。私はそのグループのリーダーだった。「子どもの家」は山の中腹にあり、また行くまでの道が狭いため、ショベルカーなどの大きな機械は入っていけない。そのため全てが手作業だった。私たちがワークをし

ている時はずっとスコップで土を掘り、それを袋に入れ、その袋をバケツリレーのようにみんなで渡し、土を捨てるという作業を来る日も来る日もしていた。雨季だったとはいえ、日差しは強くとても暑かった。毎日が自分自身との闘いだった。そんなワーク中にグループの中でも、キャンパーの中でも一人一人の役割が出てきた。みんなを盛り上げる人、それにノル人、盛り上がるのは苦手だけれどみんなをよく見て、仲間の様子がおかしいとすぐに声をかける人、気が利く子。みんながみんなの支えになっていた。1人が欠けるとワークが物足りなく感じた。ワークを通じて私は、「人は誰でも役割があり、みんな大切なのだ」ということを体験した。

City Tour ではゴミ山、日本の神風特攻隊が世界で初めて出撃したメモリアルや戦争のメモリアル、日本人が掘った防空壕、それにマーケットに連れて行ってもらった。まずゴミ山について、私はまずその光景に唖然とした。私たちは以前'Smokey Mountain'と呼ばれていた高さ30メートルもなるゴミ山の跡地と子どもの家から数十分したところにある今もゴミが捨てられている「山」、また海に面しているゴミ山に連れて行ってもらった。事前研修でゴミ山については少し学んだが、想像していたのよりもはるかに強烈だった。最初に連れて行ってもらったところが Smokey Mountain だった。今では草が生い茂っていたが、まだビニールやバクテリアによって分解されなかったゴミが見えていた。その横には最低賃労働者の人が住んでいる家があった。その横には大きなマンションも建っていた。このマンションは最低賃金労働者のために政府が建てたものなのだが、地盤が弛み今にも崩壊しそうだと言った。そして、最低賃金労働者のために建てたものであるにもかかわらず、家賃が払えないために出て行く人が多く、実際に住んでいる人は少ない。税金の無駄遣いだった。次に行った EXPO FILIPINO の跡では、これもあまり成功しなかったと言った。税金の無駄遣い、つまり裏金が回り資金不足になったためだと現地スタッフが教えてくれた。フィリピンの政府はゴミ山で暮らせざるを得ない人の実体を知っているのだろうか、疑問に思った。ゴミ山で生活している人は「スカベンジャー」と呼ばれ、小さな子どもも大人もゴミ収集車が来るたびに売れるゴミを探していた。彼らは一日 80~100 ペソ(160 円~200 円)の収入しかない。フィリピンの国民の 75%は一日働いて 190~250 ペソなのでその半分以下である。毎日生きていけるギリギリの賃金である。そして彼らの足元を見るとサンダルだった。町で捨てられるゴミは分別されていないため、刃物や、病院で使った注射の針、医療器具、生ゴミなど全てが混ぜられて捨てられる。このような劣悪な環境の中、サンダルでゴミを探し傷ができ、足が腐ってしまったり、また悪臭やハエなどの虫の中で暮らすうちに肺がおかしくなってしまう人が多くいるという。ごみ山では所々で煙が立っていた。ゴミがフィリピンの日差しにさらされ自然発火したものだった。このような環境の中での子どもたちの純粋な目や笑顔を見て違和感を感じた。「なぜこんなにかわいい子ども達が危険と隣あわせに生活しなければならないのか。」フィリピン政府に強い憤りを感じた。早く何か政策を考えてほしい。私たちはそう願う事しか出来ない無力感を感じずにはいられなかった。一方、あるゴミ山のすぐ隣には美しい海があり、たくさんの人が遊んでいた。ゴミ山ときれいな海のギャップと、そこで暮らしている人々。これが彼らの日常なのと思った。今彼らから仕事を奪ったら彼らはフィリピンで生活していく事が出来るだろうか。そこで生活しているスカベンジャーのほとんどが学校へは行っていない。教育を受けていないため良い仕事に就く事が出来ない。そのためス

カベンジャーとして生きていくしか出来ないのである。教育の重要さを感じた。学校を義務教育にしたり、制服や教材を国が寄付する事は出来ないのだろうか。たくさんの方があった。

次に戦争のメモリアル、ピースセミナーについて述べたい。戦争のメモリアルはどれも日本兵がフィリピン人に対してしてしまった事をフィリピン人が忘れないためであった。しかし、神風特攻隊のメモリアルでは少し違和感を感じた。日本兵はフィリピンを攻め、憎むべき相手であるにもかかわらず、特攻隊を美化させるような文章と一緒にメモリアルが立っていた。私たちにとっては歴史上忘れてはいけない戦争の犠牲者である。しかしなぜフィリピンにあるのだろうか。このメモリアルを見るフィリピン人がどう思うのか、そもそもフィリピン人で訪れる人がいるのだろうか。ピースセミナーでは「子どもの家」のある村からトマサさんというおばあさんが来て戦争中に日本兵がしたことや、トマサさんが日本兵にされた事を話してくれた。どれも耳をふさぎたくなるような話だった。日本人としてこれほど恥じた事はなかった。メモリアルの一つに「死の行進」のものがあつた。これは日本兵がフィリピン人兵、アメリカ兵、オーストラリア兵の捕虜を5日間(150キロの道のり)の間水や食料を与えずに歩かせたものである。これは真珠湾攻撃の2時間後に起こったことである。しかし私たちは知らなかった。学ばなかったのである。そして日本兵が来たことを知らせるために使われた教会を見た時に、スタッフの人から「日本兵は、話し合いをするからとフィリピン人を教会に集め、ドアを閉めて彼らを焼き殺した」という話も聞いた。トマサさんの話では村の人々が受けた虐待の話も聞いた。その夜、日本兵が子ども達や妊婦に対してしたことをスタッフさんが話してくれた。日本兵は2歳くらいの子どものを空中に投げ、その子が落ちてくるところをナイフで串刺しにした事、子どもの髪を引っ張って柱に頭を思い切りぶつけて殺した事、妊婦のお腹を裂いて子どもを取り出し妊婦ともども殺した事など悲惨な話を聞いた。私はフィリピン人に対してどう接すればよいのかわからなくなった。今まで一緒にすごしていた子どもたちや仲間が聞いてどう日本人のことを思うのか恐怖を感じた。私たちの祖父母の世代がそんな事をしていたと思うと怖かったし、私が戦争に行っていたら同じ事をしてしまったのかもしれないと思うと怖かった。戦争は人を狂わせるものだ。だから繰り返してはいけない。しかし、私たちの世代は戦争を知らない。それでもこのようなことを二度と起こさないために、戦争を体験した祖父母を持つ私たちがどう次の世代に伝えていくかが大切だと感じる。私たちは過去にしてしまった事を認めた上で、本当の他国の人たちとの国際関係が結べるのだと思う。フィリピン人は私たち日本人を受け入れてくれていると感じた。今度は私たちが歩み寄る番だ。

そして「子どもの家」の子どもたちはみんな純粋で明るいかわいい子どもたちだった。そんな子ども達の中で生活しているうちに彼らが虐待を受けていたことがあり、傷ついているということも忘れていた。しかし、スタッフさんにどんな虐待を受けていたのか聞いた時ハッとした。また、「子どもの家」にインターンとしてきていた人に「みんなあなた達に愛されたいからあんな笑顔なんだよ」と言われた。子ども達は私が想像できないくらい深い傷を負っている。しかし、そんな子ども達からワークのあとたくさんの元気をもらった。私たちキャンパーは子ども達を愛していた。だから私たちは彼らの笑顔のためにきついワークも楽しめたのだと思う。

このようにたくさんの方のことを学び、考えたワークキャンプで私たちは確実に成長できた。日本に

いては体験できなかった事、知り得なかったことを私たちキャンパーはたくさんの人に伝えなければならぬと感じた。フィリピン人の温かさ、文化、戦争で日本兵がしてしまった事、貧困についてみんなに知ってほしいと感じた。さまざまなバックグラウンドを抱えた仲間達と共に過ごした14日間は多くの意義を持ち、忘れられないものとなった。